

愛知県東海市

東畑遺跡等試掘調査報告

1997

愛知県東海市教育委員会

愛知県東海市

ひがしはた
東畑遺跡等試掘調査報告

1997

愛知県東海市教育委員会



▲名古屋鉄道太田川駅周辺航空写真
(平成9年1月撮影)



◀No.2調査区土層写真(西面)

はじめに

- 本書は愛知県東海市大田町下浜田・後田・郷中・畑間・蟹田・前田・東畑・的場周辺に分布する遺物散布地の試掘調査の報告書である。
- 調査は、平成8年（1996年）8月19日から9月18日まで東海市教育委員会が行った。
- 調査にあたっては、愛知県教育委員会文化財課・東海市役所中心街整備事務所の御協力を得た。
- 本書の執筆は、立松彰が担当した。
- 出土遺物は東海市立郷土資料館収蔵庫にて保管する。

目次

調査の経緯と遺跡の位置	1
各調査区の状況	
No.1 調査区	3
No.2 調査区	6
No.3 調査区	9
No.4 調査区	10
No.5 調査区	11
No.6 調査区	13
No.7 調査区	14
No.8 調査区	16
No.9 調査区	17
No.10 調査区	19
No.11 調査区	20
No.12 調査区	21
No.13 調査区	22
No.14 調査区	23
No.15 調査区	24
No.16 調査区	26
No.17 調査区	28
No.18 調査区	29
No.19 調査区	31
No.20 調査区	33

插图 目 次

<p>图1 束埔寨遺跡等位置圖……………1</p> <p>图2 試掘調査区位置圖……………2</p> <p>图3 No.1 調査区位置圖……………3</p> <p>图4 No.1 調査区層序……………3</p> <p>图5 No.1 調査区平面圖……………4</p> <p>图6 No.1 調査区出土遺物……………4</p> <p>图7 No.1 調査区遠景写真……………4</p> <p>图8 No.1 調査区挽き白出土状態写真……………5</p> <p>图9 No.1 調査区土層写真……………5</p> <p>图10 No.2 調査区位置圖……………6</p> <p>图11 No.2 調査区層序……………6</p> <p>图12 No.2 調査区平面圖……………7</p> <p>图13 No.2 調査区出土遺物……………7</p> <p>图14 No.2 調査区出土遺物写真……………8</p> <p>图15 No.2 調査区土層写真……………8</p> <p>图16 No.3 調査区位置圖……………9</p> <p>图17 No.3 調査区層序……………9</p> <p>图18 No.3 調査区土層写真……………9</p> <p>图19 No.4 調査区位置圖……………10</p> <p>图20 No.4 調査区層序……………10</p> <p>图21 No.4 調査区土層写真……………10</p> <p>图22 No.5 調査区位置圖……………11</p> <p>图23 No.5 調査区平面圖……………11</p> <p>图24 No.5 調査区層序……………11</p> <p>图25 No.5 調査区土層写真……………12</p> <p>图26 後出遺跡出土土台付甕形土器……………12</p> <p>图27 No.6・No.7 調査区位置圖……………13</p> <p>图28 No.6 調査区層序……………13</p> <p>图29 No.6 調査区土層写真……………13</p> <p>图30 No.7 調査区層序……………14</p> <p>图31 No.7 調査区出土遺物……………14</p> <p>图32 No.7 調査区出土遺物写真……………14</p> <p>图33 No.7 調査区土層写真……………15</p> <p>图34 No.8 調査区土層写真……………15</p> <p>图35 No.8 調査区位置圖……………16</p> <p>图36 No.8 調査区層序……………16</p> <p>图37 No.8 調査区出土遺物……………16</p> <p>图38 No.9 調査区位置圖……………17</p> <p>图39 No.9 調査区層序……………17</p> <p>图40 No.9 調査区土層写真……………18</p> <p>图41 No.10 調査区土層写真……………18</p> <p>图42 No.10 調査区位置圖……………19</p>	<p>图43 No.10 調査区層序……………19</p> <p>图44 No.10 調査区遠景写真……………19</p> <p>图45 No.11 調査区位置圖……………20</p> <p>图46 No.11 調査区層序……………20</p> <p>图47 No.11 調査区土層写真……………20</p> <p>图48 No.12・No.13 調査区位置圖……………21</p> <p>图49 No.12 調査区層序……………21</p> <p>图50 No.12 調査区土層写真……………21</p> <p>图51 No.13 調査区層序……………22</p> <p>图52 No.13 調査区土層写真……………22</p> <p>图53 No.14 調査区位置圖……………23</p> <p>图54 No.14 調査区層序……………23</p> <p>图55 No.14 調査区土層写真……………23</p> <p>图56 No.15 調査区位置圖……………24</p> <p>图57 No.15 調査区層序……………24</p> <p>图58 No.15 調査区出土遺物……………25</p> <p>图59 No.15 調査区土層写真……………25</p> <p>图60 No.15 調査区出土遺物写真……………25</p> <p>图61 No.16 調査区位置圖……………26</p> <p>图62 No.16 調査区層序……………26</p> <p>图63 No.16 調査区出土遺物……………26</p> <p>图64 No.16 調査区土層写真……………27</p> <p>图65 No.17 調査区土層写真……………27</p> <p>图66 No.17 調査区位置圖……………28</p> <p>图67 No.17 調査区層序……………28</p> <p>图68 No.17 調査区平面圖……………28</p> <p>图69 No.17 調査区出土遺物……………28</p> <p>图70 No.18 調査区位置圖……………29</p> <p>图71 No.18 調査区層序……………29</p> <p>图72 No.18 調査区出土遺物……………30</p> <p>图73 No.18 調査区土層写真……………30</p> <p>图74 No.19 調査区位置圖……………31</p> <p>图75 No.19 調査区層序……………31</p> <p>图76 No.19 調査区出土遺物……………32</p> <p>图77 No.19 調査区出土遺物写真……………32</p> <p>图78 No.19 調査区土層写真……………32</p> <p>图79 No.20 調査区位置圖……………33</p> <p>图80 No.20 調査区層序……………33</p> <p>图81 No.20 調査区出土遺物……………34</p> <p>图82 No.20 調査区土層写真……………35</p> <p>图83 No.20 調査区出土遺物写真(1)……………36</p> <p>图84 No.20 調査区出土遺物写真(2)……………36</p>
--	---

表 目 次

<p>表1 No.2 調査区貝類組成表……………7</p> <p>表2 No.8 調査区貝類組成表……………16</p>	<p>表3 No.9 調査区貝類組成表……………17</p> <p>表4 No.18 調査区貝類組成表……………30</p>
--	--

調査の経緯と遺跡の位置

調査の経緯 東海市では、市の鉄道交通の中心である名古屋鉄道太田川駅周辺を、市の表玄関にふさわしい高次都市機能を持つ個性的で魅力ある中心市街地として総合的に整備する目的で「中心市街地」整備計画を推進している。この大規模計画地域にはいくつかの埋蔵文化財包蔵地があり、埋蔵文化財の所在、範囲及び性格を明らかにし、開発等と調整する目的で試掘調査を実施したものである。

遺跡の位置と環境 知多半島北部の伊勢湾に面する東海市大田町・高横須賀町・横須賀町・養父町、知多市八幡にかけての地域は、半島の中でも広い面積をもつ海岸平地が広がっている。この海岸平地には3条の砂堆（海の底で形成された沿海州が、海水位の下降にともなう海退により、一挙に陸化され、地上へ姿をあらわしたものであって、砂丘や浜堤と区別してよぶ）列が分布しており、原始・古代以降の遺跡が立地し、近世・現代においても集落が形成されている。

今回、試掘調査を実施した区域は、この海岸平地の北部にあって、砂堆は東西に流れていた旧大田川流路によって分断されている。現在、海岸平地の北端を流れる大田川は、尾張藩二代藩主徳川光友が、高横須賀町の地先に潮湯治の別荘である横須賀御殿を造営する際に、改修したものと¹⁰いわれる。

砂堆は、最も西の旧海岸寄り名鉄常滑線沿いに1列、その東側の大宮神社に連なるものが2列目、そして、その東方の大田町の集落が形成され、弥勒寺の丘陵に連なる3列目が存在する。この



図1 東畑遺跡等位置図（網目＝砂堆）
（国土地理院 1/50000 名古屋南部・半田）
1松崎遺跡 2下浜田遺跡 3後田遺跡 4神宮前遺跡 5王塚古墳
6龍雲院遺跡 7畑間遺跡 8東畑遺跡 9法海寺遺跡 10細見遺跡

砂堆列に8カ所の遺跡（発掘調査等で遺跡であることが明確であるもののほか、遺物が散布していることから遺跡としているものもある）が分布する。砂堆1列目には北から古代土器製塩遺跡の松崎遺跡と下浜田遺跡が、2列目には後田遺跡（古墳時代）が、3列目には北から神宮前遺跡（土師器散布）・王塚古墳（横穴式石室・後期）・龍雲院遺跡（製塩土器散布）・畑間遺跡（須恵器・灰釉陶器・山茶碗等散布）・東畑遺跡（弥生中期以降）が立地する。

砂堆上の遺跡についてみると、この海岸平地の南部に立地する知多市の細見遺跡・法海寺遺跡では弥生時代前期から継続して営まれるが、北部では弥生時代中期以降からのようである。

*杉崎章 1971『愛知県東海市柳が坪遺跡』
東海市教育委員会

*横須賀町史編集委員会編 1969『横須賀町史』



図2 試掘調査区位置図 (S=1/5000)

(一点鎖線は砂堆の範囲, 点線は遺跡分布推定範囲)

各調査区の状況

No. 1 調査区



図3 No.1調査区位置図(S=1/1000)

位置 No.1調査区は、海岸から内陸に向かって数えて3列目の砂堆列のほぼ中央の東端に位置する。現在の場所は、名鉄太田川駅から東方の愛知県立東海商業高等学校へ向かう道路が、市道名和養父線（東海市役所の西を南北に走る）と交差する大田小学校入口交差点より南西へ40mほどの畑にあたる。

層序 地表面は標高4.22mで、上面から畑耕作土の黄色い砂層が15cm、その下によくしまつて硬い黄褐色の砂層が60cm、その下に遺物を包含する黒褐色の砂層が35cmの厚さで堆積し、地山面の礫の混在する黄灰色砂層に達している。地山面までの深さは約1mで、その標高は3.2mほどである。

土層は、各層とも整合な状態で堆積している。

遺構 ビット（小穴）を2カ所検出した。北寄りの1カ所（ビット2）は、直径30cm・深さ15cm、西寄りの1カ所（ビット1）は、直径20cm・深さ30cmの大きさである。軟質な砂質面に残る遺構としては比較的良好な遺存状態である。

遺物 地表面で素焼き（土師器）の壺形土器片を採集している。3層目の黒褐色砂層上面から鉄釉鉢4、挽き白5、高さ11cmほどの割れた丸石が出土。地山面寄りの方から山茶碗1・2、山皿3、伊勢型鍋口縁部片が出土した。また、ビット2の埋土から、山茶碗の口縁部片が出土している。

山茶碗、山皿は、常滑窯^常の4型式期（13世紀前半）の製品とみられる。鉄釉鉢の底部片は、

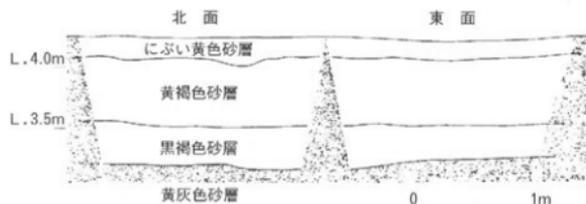


図4 No.1調査区層序

素地が赤褐色で内外面に茶色の鉄釉が刷毛塗りで施されている。挽き白5は茶白の上白で、中央に1辺1.6cmの方形の穴が貫通している。下面には8分割された中に9～11本の溝が刻

まれている。側面には、のみ（鑿）痕が残る。

所見 中世の遺跡が存在するものと考えられる。

*中野晴久 1994 赤羽・中野「生産地における編年について」『中世常滑窯をおいて』資料集 日本福祉大学知多半島総合研究所 常滑窯製品の編年については、以下も同じである。

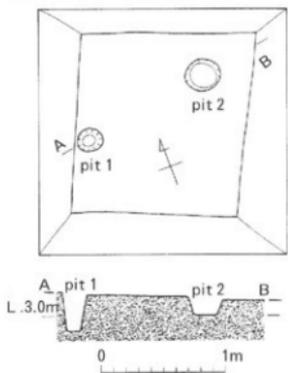


図5 No 1調査区平面図

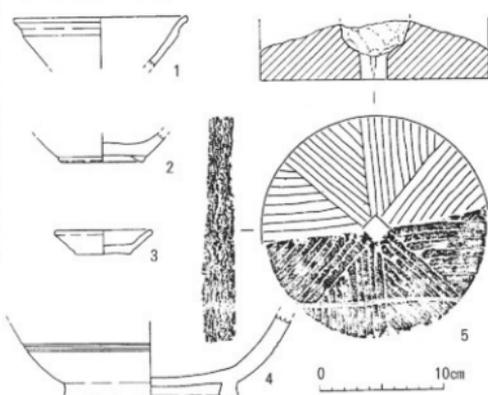


図6 No 1調査区出土遺物



図7 No 1調査区遠景写真（南東から）

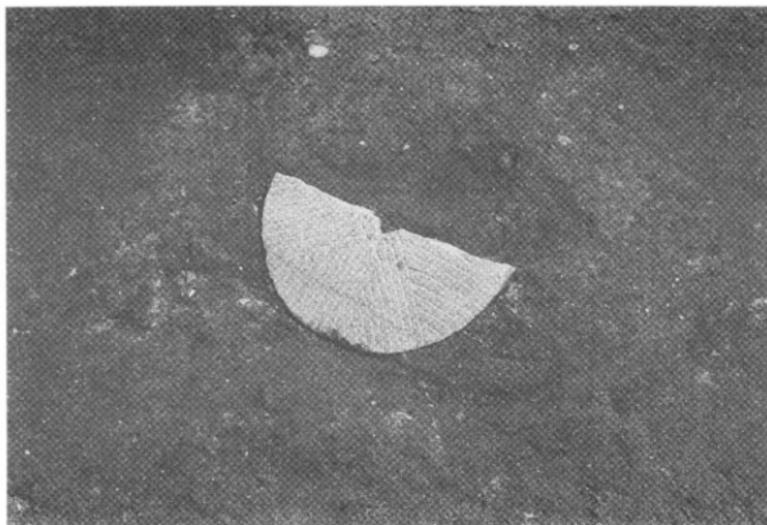


图8 No.1 調査区挽き臼出土状態写真



图9 No.1 調査区土層写真(南面)

No. 2 調査区

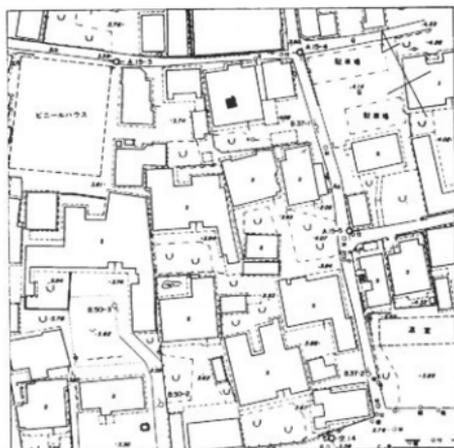


図10 No 2調査区位置図(S=1/1000)

位置 No 2調査区は、海岸から内陸に向かって数えて3列目の砂堆列のほぼ中央に位置する。現在の場所は、名鉄太田川駅から東方の愛知県立東海商業高等学校へ向かう道路の常進寺の表あたりから北へ入る道を75mほど入った四つ角南西の住宅だったところにあたる。

層序 地表の標高は3.88mで、表土面はよくしまった硬い黄褐色及びオリブ褐色の砂層で、厚さは15cm~30cmほどである。その下に、破砕された貝殻を混入する硬質の黒褐色砂層及び貝を混入しない暗オリブ褐色砂層が15cm~30cmの厚さで広がる。その下に破砕された貝殻を混入するオリブ黒色砂層が50cmの厚さで広がり、つい

で15cm~30cmの厚さで貝の混入しないオリブ黒色砂層が堆積し、地山面の灰オリブ色砂層に達している。地山面までの深さは約1.2mで、その標高は2.6mほどである。

遺構 南西角で深さ20cmほどの土壌とみられる遺構の一部を検出した。

遺物 3層目の混貝オリブ黒色砂層から須恵器の壺・蓋杯の破片、弥生土器ないし土師器の壺形土器の底部片、灰釉陶器の椀、山茶碗6・7・9・10・11、山皿12・13、素焼きの伊勢型鍋16、羽釜(羽付鍋)17、平瓦4、近世期的ものとみられる陶器片が出土。また、4層目のオリブ黒色砂層から条痕文を施す素緑の壺形土器1、製塩土器2、須恵器の壺、灰釉陶器の椀、山茶碗5・8、山皿14・15が出土した。このほか、黒色瓦質の沈線の文様を施す焼き物破片3を採集した。

条痕文壺形土器1は、砂粒を多く含む胎土で、暗赤褐色を呈する。内傾する壺形ないし鉢形土

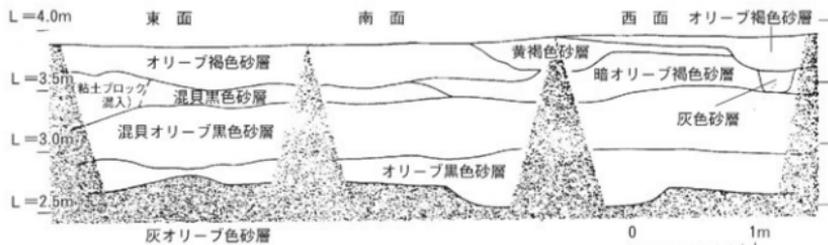


図11 No 2調査区層序

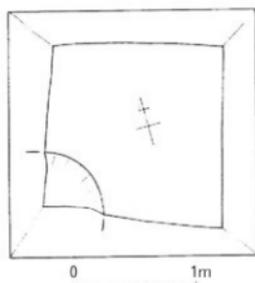


図12 No.2 調査区平面図

器の口縁部である。製塩土器2は、知多式塩製土器3類（7世紀前半）の脚部で、方形の穴があけられている。平瓦4は、凸面に縄目叩きを施す。山茶碗、山皿は、常滑窯編年の4型式期ないし5型式期（13世紀前半）の製品とみられる。

3層目の混貝オリブ黒色砂層の貝類については、20cmのサンプリング資料によれば表1のとおりである。

所見 条痕文土器1の時期は特定できないが、弥生時代前期（水神平式期？）にあたるものと考えられる。製塩土器も散布するが、基本的には中世の遺跡が存在するものと考えられる。

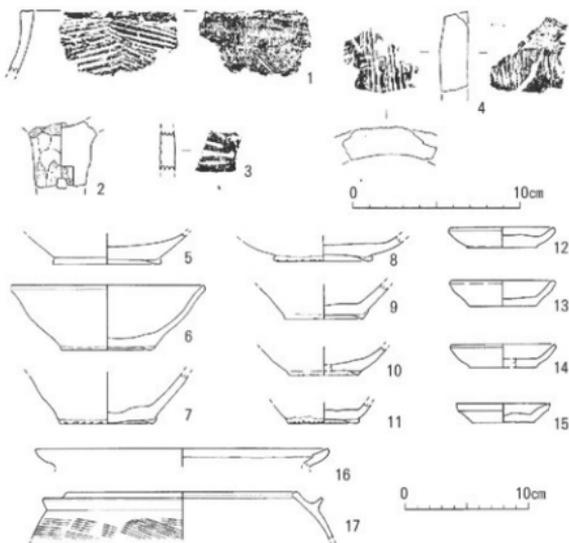


図13 No.2 調査区出土遺物(1~4・S=1/3 5~17・S=1/4)

表1 No.2 調査区貝類組成表

種名	数量		%
	種類数	個体数	
鹹	ハマグリ	9	37.5
	イボウミニナ	8	33.3
水産	シオフキ	5	20.8
	マガキ	1	4.2
	サルボウ	1	4.2
計		24	100.0

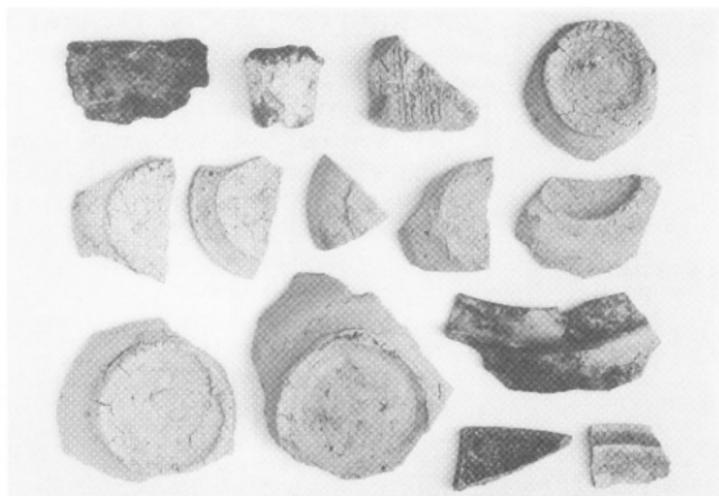


图14 No 2 調査区出土遺物写真



图15 No 2 調査区土層写真 (南面)

No. 3 調査区



図16 No.3調査区位置図(S=1/1000)

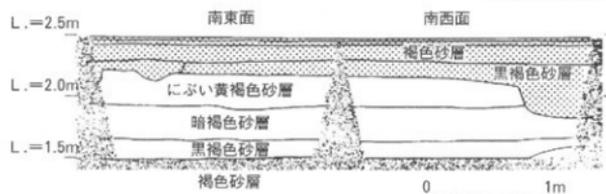


図17 No.3調査区層序



遺物 地上上に広がる黒褐色砂層の上から知多式製塩土器4類、内耳鍋、素焼きの皿、すり鉢、近世期のものとみられる施釉陶器など雑多な時代の遺物が出土した。

所見 出土遺物が少量かつ細片で、時期も雑多であることからみて、別の地域からの流れ込みなどの影響を受けた区域とみられる。

◀ 図18 No.3調査区土層写真(南西面)

位置 No.3調査区は、海岸から内陸に向かって数えて3列目の砂堆列のほぼ中央の西側(海方向)に位置する。現在の場所は、大岡郵便局のある筋より1本東の筋を東に入った、工場の跡地である。

層序 地表の標高は2.5mで、アスファルトの施された表土面から30cmほどは新しい時代の盛土である。その下に、にぶい黄褐色砂層が25cmほど、ついで、暗褐色砂層が30cmほど、そして、黒褐色砂層が15cmほど堆積して、地山面の褐色砂層に至っている。黒褐色砂層の上には、炭化物の散布が認められる。地山面までの深さは約1.0mで、その標高は1.5mほどで、下から水が染み出してくる。

No. 4 調査区



図19 No. 4 調査区位置図(S=1/1000)

位置 No.4 調査区は、海岸から内陸に向かって数えて2列目の砂堆列の南端の先に位置する。現在の場所は、名鉄太田川駅の北方の池田耳鼻咽喉科医院のある道筋南東の住宅跡にあたる。

層序 地表の標高は2.2mで、表土面から1.6mほどはすべて新しい時期の盛土である。その下に、深さ15cmほどの黒色砂層が堆積し、地山面とみられる黒色の粗砂層に至っている。地山面までの深さは約1.8mで、その標高は0.4mほどで、下から水が染み出てくる。このあたりは、かつては水田があったところである。

遺物 無し。

所見 砂堆の外の低地にあたる地域である。

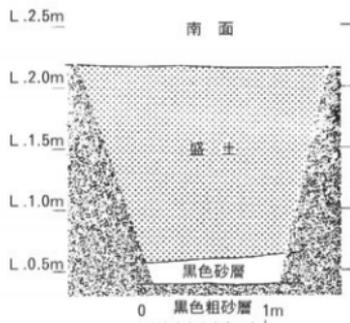


図20 No. 4 調査区層序



▶ 図21 No. 4 調査区土層写真 (南面)

No. 5 調査区



図22 No 5 調査区位置図(S=1/1000)

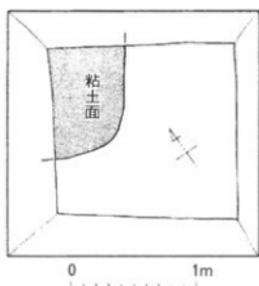


図23 No 5 調査区平面図

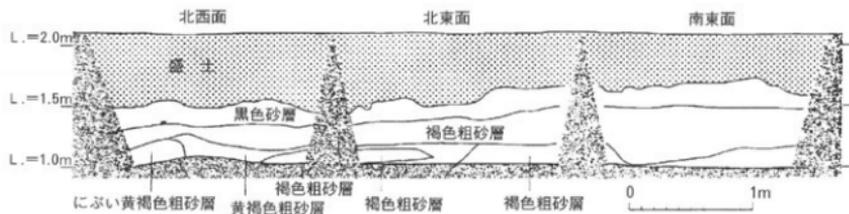


図24 No 5 調査区層序

位置 No 5 調査区は、海岸から内陸に向かって数えて2列目の砂堆列のほぼ中央に位置する。現在の場所は、名鉄太田川駅の北方約240mの線路の東側に位置する。住宅があったところである。

層序 地表の標高は2.1mで、表土面は新しい時期の盛土である。その下に、厚さ20cmほどの黑色砂層、ついで、厚さ30cmほどの褐色粗砂層が広がり、その下に、15cm~20cmの厚さでにぶい黄褐色粗砂層・褐色粗砂層・粘土ブロックの混入する黄褐色粗砂層などが堆積し、褐色粗砂層の地山面に達している。地山面までの深さは約1.1mで、その標高は1.0mほどである。

遺構 北角に粘土面が広がる。

遺物 無し。

なお、昭和30年代に後田から出土(地点不明)した台付甕形土器(図26)が、東海市立郷土資料館に保管されている。

所見 遺物は出土していないが、砂堆上に立地していることと、自然堆積では存在しない粘土の面が広がっていることから、何らかの遺跡の存在する可能性が高いところである。

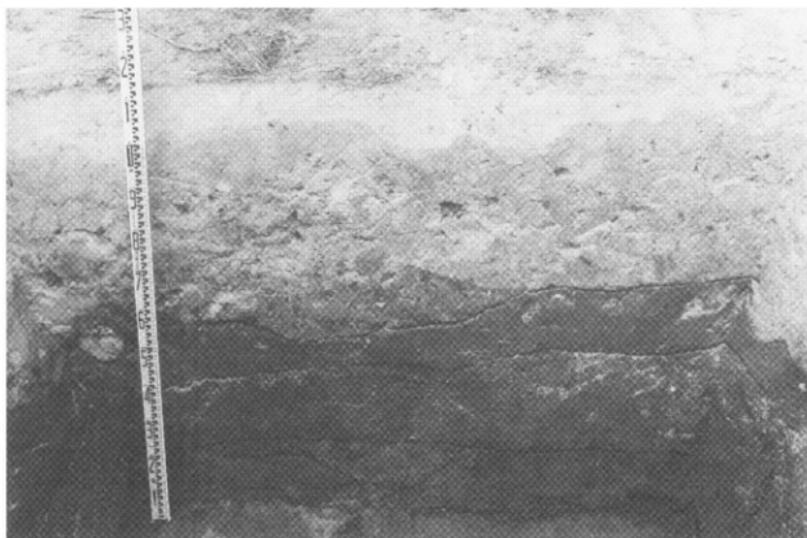


図25 No 5 調査区土層写真 (北西面)



図26 後田遺跡出土台付壺形土器

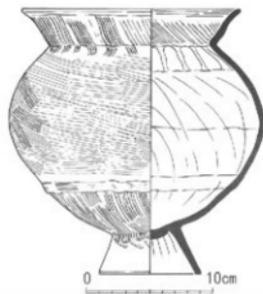


図26の实测図

No. 6 調査区



図27 No. 6・No. 7 調査区位置図(S=1/1000)

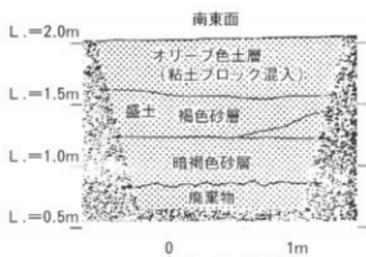
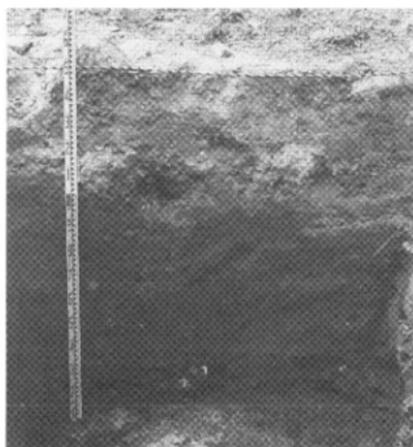


図28 No. 6 調査区層序

▶ 図29 No. 6 調査区土層写真(南東面)



位置 No.6 調査区は、海岸寄りの砂堆列の南端に位置する。現在の場所は、名鉄太田川駅の西方を南北に走る国道247号線の太田町交差点の南西にあたる。宅地だったところである。

層序 地表の標高は2.0mで、その下に、3層ほどが1.2mの厚さで堆積するが、これらはすべて新しい時期の盛土である。その下に、瓦・赤焼きの大甕・陶磁器・ガラス瓶などの新しい時期の廃棄層が堆積しているが、地山面までは湧水のため調査できなかった。
遺物 無し。

所見 海岸寄りの砂堆列は、この地点までは分布しておらず、低地になっている。

No. 7 調査区

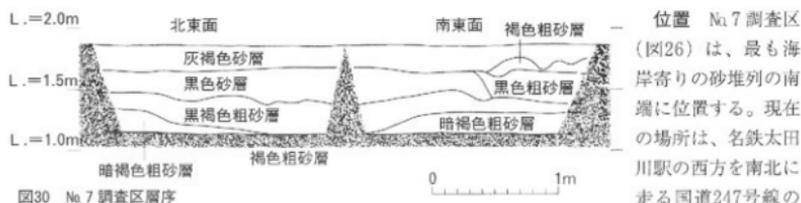


図30 No.7 調査区層序

大田町交差点から50mほど北へ行った東側にあたる。

層序 地表面は標高1.85mで、表土面から下へ向かって、灰褐色の砂層が20cm、遺物を包含する黒色砂層が20cm～30cm、黒褐色粗砂層が30cmほど堆積して、地山面の褐色粗砂層に達している。地山面上には部分的に暗褐色粗砂層が分布する。地山面までの深さは約0.7mで、その標高は1.15mほどである。

遺物 2層目の黒色砂層から土師器壺形土器・製塩土器1～9・灰釉陶器碗10が出土している。製塩土器1・2の脚は、砂粒の多い胎土で握り放しのままの指の痕が残り、知多式の3類に属す。3～9は脚の表面が平滑で先端が細く尖るもので知多式の4類に該当する。身の部分と接する脚の太さが2.4cmと大きいもの4と1.4cmと小さいもの9がある。灰釉陶器碗10は、断面が四角形の高台を付ける。

所見 No.7の調査区のある砂堆は、土器製塩遺跡が北から松崎遺跡・下浜田遺跡と続いており、この地点あたりまで広がっているようである。

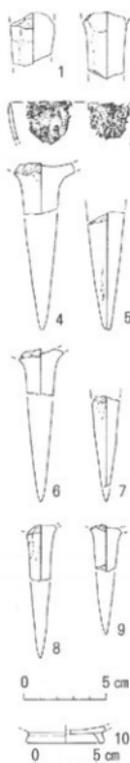


図31 No.7 調査区出土遺物 (1～9・S=1/3, 10・S=1/4)



図32 No.7 調査区出土遺物写真

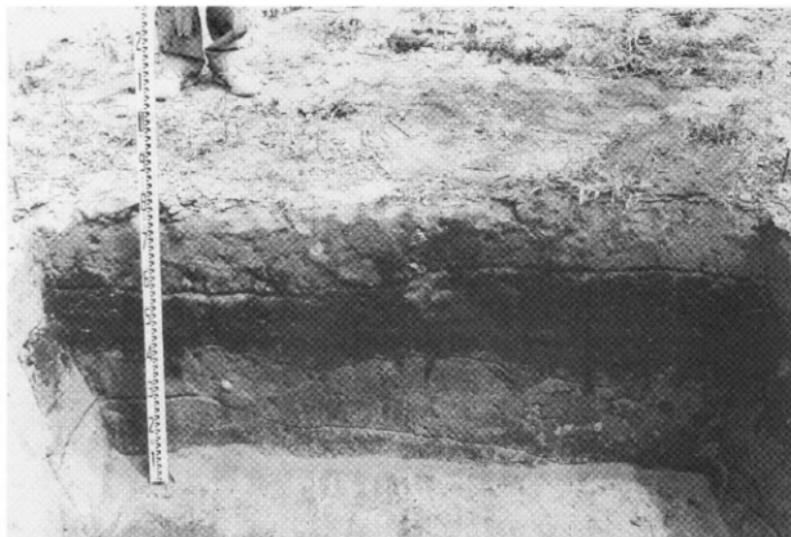


图33 No 7 調査区土層写真 (南東面)

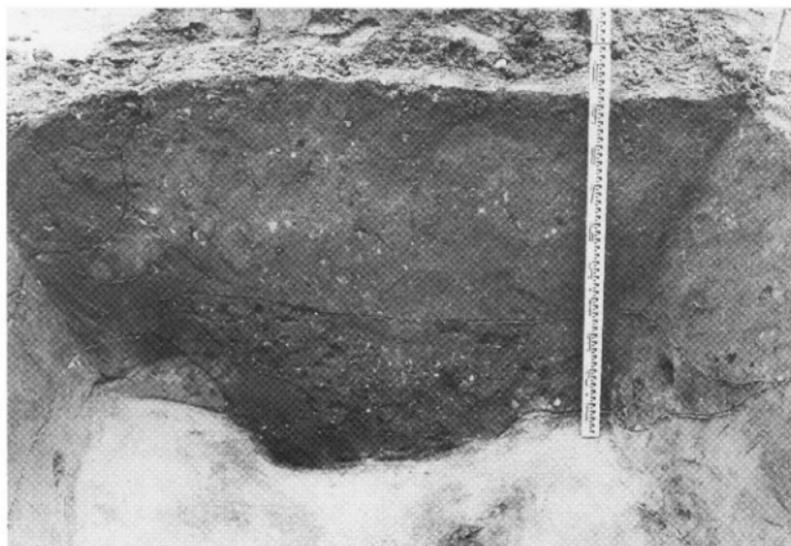


图34 No 8 調査区土層写真 (北東面)

No. 8 調査区

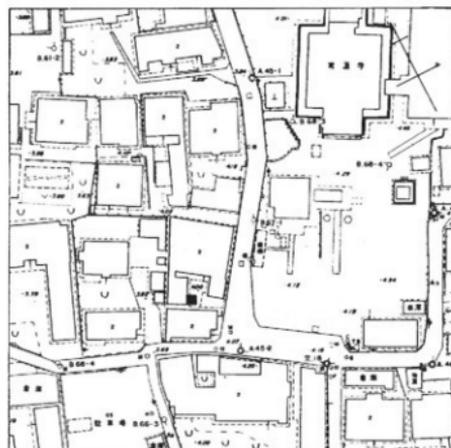


図35 No. 8調査区位置図(S=1/1000)

位置 No. 8調査区は、海岸から内陸に向かって数えて3列目の砂堆列のほぼ中央に位置する。現在の場所は、常蓮寺境内から道をはさんだ西側にあたる。

層序 地表面は標高4.0mで、表面から50cmほどは後世の攪乱が認められ、西端には深さ1.2mほどの廃棄穴があげられ、新しい時期の瓦などが捨てられている。攪乱層の下にオリーブ黒色砂層、灰オリーブ色砂層、破碎された貝の混入する黒褐色砂層、黄褐色砂層などが入り組んで堆積し、地山面とみられる褐色粗砂層に達している。地山面までの深さは約1.0mで、その標高は3mほどである。

遺物 表土の攪乱層の下に堆積する混貝黒褐色砂層から、須壺器蓋杯の蓋1、常滑焼の大甕2、すり鉢、内耳鍋、赤焼きの土管、近世期の陶器が出土した。

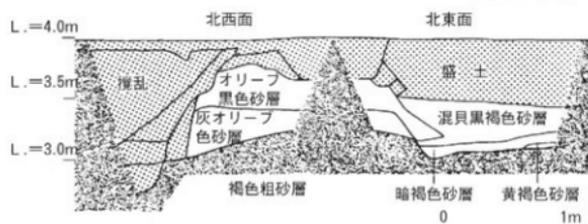


図36 No. 8調査区層序

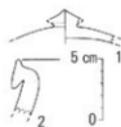
常滑焼の大甕2は、口縁部の小破片ではあるが、その特徴からみて常滑窯編年の6b型式期(13世紀後半)の製品とみられる。

混貝黒褐色砂層から20cmをブロック・サンプリングした貝の組成は表2のとおりである。なお、近所の方の話によれば、この調査区の西に貝塚が分布する地点があるようである。
所見 この地点周辺地域に、中世の遺跡が存在すると思われる。

表2 No. 8調査区貝類組成表

種名	数量	個体数	%
鹹水産	シオフキ	10	33.3
	イボウミナ	9	30.0
	ハマグリ	4.5	15.0
	アカニシ	1	3.3
	アサリ	1	3.3
陸産	ヤマトシジミ	1	3.3
	マテガイ (小さい巻貝)	0.5	1.7
陸産	タニシ	2	6.7
陸産	計	1	3.3
	計	30	99.9

図37 No. 8調査区出土遺物



No. 9 調査区



図38 No. 9調査区位置図(S=1/1000)

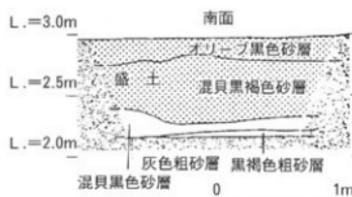


図39 No. 9調査区層序

位置 No. 9調査区は、海岸から内陸に向かって数えて3列目の砂堆列のほぼ中央の西寄りに位置する。現在の場所としては、大田町郷中を南北と東西に伸びる道筋交差点から130mほど南に下った東方の宅地があったところである。

層序 地表の標高は2.95mで、表土面はよくしまった硬い20cmほどのオリブ黒色の盛土で、その下に破碎された貝殻を混入する黒褐色砂層が50cmの厚さで広がり（この層も盛土とみられる）、ついで15cmの厚さで混貝黒色砂層と黒褐色粗砂層が堆積し、地山面の灰色粗砂層に達している。地山面までの深さは約0.8mで、その標高は2.15mほどである。地山面からは水が湧きでてくる。

遺物 2層目の盛土とみられる混貝黒褐色砂層から山茶碗と内耳鍋の破片が出土している。

3層目の混貝黒色砂層の20cmのブロック・サンプリングの貝類組成は、表3のとおりである。

所見 地山面の灰色粗砂層は、海岸の砂浜のように見受けられる。

表3 No. 9調査区貝類組成表

種名	数量	固体数	%
雑	イボウミニナ	10	52.6
	ハマグリ	3.5	18.4
	ヤマトシジミ	2	10.5
水	アカニシ	1	5.3
	アサリ	0.5	2.6
産	サルボウ	0.5	2.6
	マガキ	0.5	2.6
	陸産	タニシ	1
計		19	99.9



图40 No 9 調査区土層写真 (南面)



图41 No10調査区土層写真 (北東面)

No.10 調査区

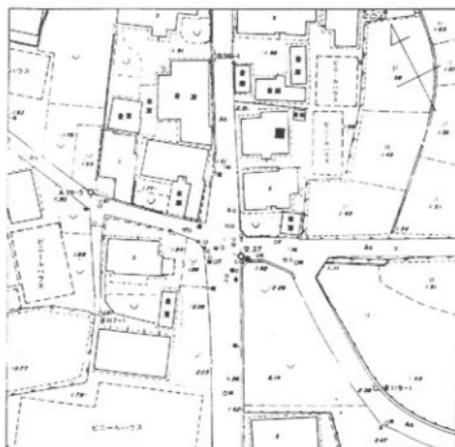


図42 No.10調査区位置図(S=1/1000)

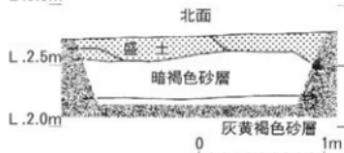
位置 No.10調査区は、海岸から内陸に向かって数えて3列目の砂堆列のほぼ中央の南端に位置する。現在の場所は、大田町郷中を南北に走る道の南方の集落の民家が途絶えた東側の宅地跡にあたり、周辺には水田が巡っている。

層序 地表の標高は2.7mで、20cmほどの盛土があって、その下に、暗褐色砂層が35cmほど堆積して地山面の灰黄褐色砂層に至っている。地山面までの深さは約0.6mで、その標高は2.1mほどで、下から水が染み出してくる。

遺物 無し。

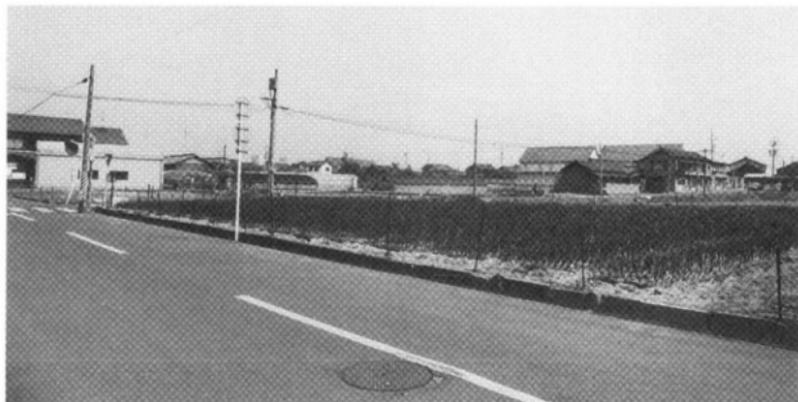
所見 砂堆の縁に位置する。

L. 3.0m



◀ 図43 No.10調査区層序

▼ 図44 No.10調査区遠景写真(西から)



No.11 調査区



図45 No11調査区位置図(S=1/1000)

位置 No11調査区は、海岸から内陸に向かって数えて3列目の砂堆列の南端の低地に位置する。現在の場所は、名鉄太田川駅から分岐した河和線と大田町の郷中を南北に走る道が交差する踏切東の畑にあたる。

層序 地表の標高は2.0mで、表土面から1.3mほどはすべて新しい時期の盛土である。その下に、厚さ15cmほどの緑黒色砂層が堆積し、地山面とみられる緑黒色の粗砂層に至っている。地山面までの深さは約1.5mで、その標高は0.6mほどで、下から水が染み出てくる。このあたりは、かつては水田があったところである。

遺物 無し。

所見 砂堆から外れた低湿地である。

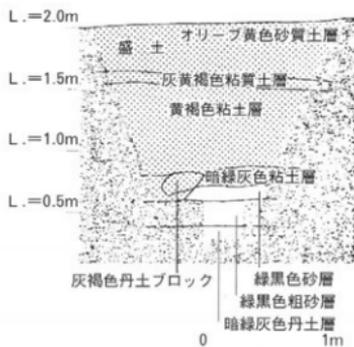
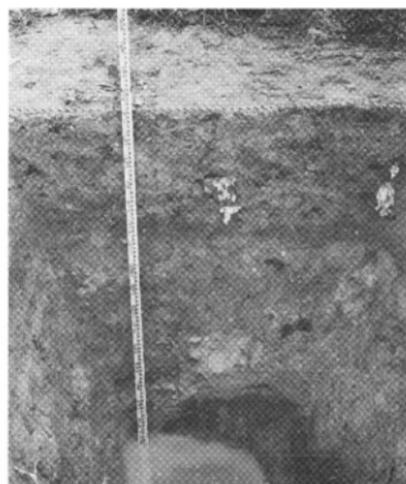


図46 No11調査区層序



▶ 図47 No11調査区土層写真(北東面)

No.12 調査区



図48 No.12・No.13調査区位置図(S=1/1000)

位置 No.12調査区は、海岸から内陸に向かって数えて3列目の砂堆列のほぼ中央で、北に向かって入り込んだ低地に位置する。現在の場所は、No.10調査区より南へ100mほど入り込んだところである。かつては、水田であったところである。

層序 地表の標高は3.8mで、1mほどはすべて新しい時期の盛土である。その下に、厚さ10cmほどの黒色粗砂層及びオリーブ黒色砂層が堆積し、灰オリーブ色粗砂層の地山面に達している。地山面までの深さは約1.1mで、その標高は2.7mほどである。

遺物 無し。

所見 砂堆の縁にあたる。

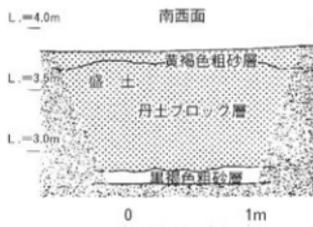


図49 No.12調査区層序

▼ 図50 No.12調査区土層写真(北西面)



No.13 調査区

位置 No.13調査区は、海岸から内陸に向かって数えて3列目の砂堆列のほぼ中央で、北に向かって入り込んだ低地に位置する。現在の場所としては、No.12調査区より南西へ60mほど入り込んだところである。かつては、水田であったところである。

層序 地表の標高は3.5mで、地山面とみられる灰オリーブ色粗砂層まで、すべてが盛土である。地山面までの深さは約1.3mで、その標高は2.2mほどである。

遺物 無し。

所見 砂堆の縁にあたる。

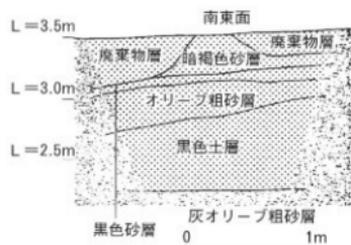


図51 No.13調査区層序

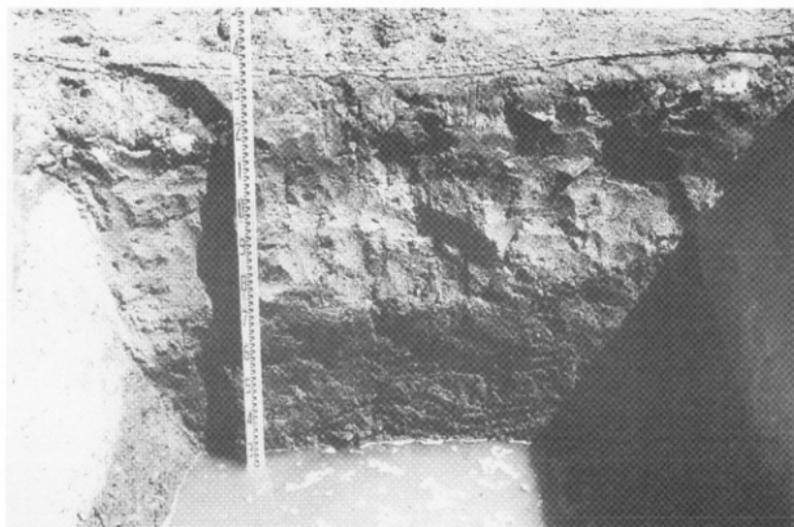


図52 No.13調査区土層写真（南東面）

No.14 調査区

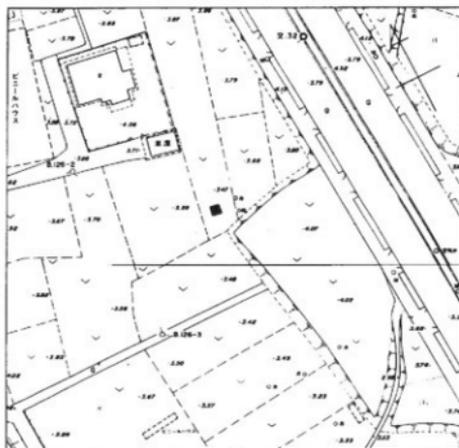


図53 No.14調査区位置図(S=1/1000)

位置 No.14調査区は、海岸から内陸に向かって数えて3列目の砂堆列のほぼ中央の東端に位置する。現在の場所は、市道名和養父線の大田小学校入口交差点より南へ270mほど行ったところにある歩道橋の西にあたる。

層序 地表の標高は3.5mで、上から下へ向かって黒褐色砂層が25cm、ついで暗褐色砂層が20cm、その下に黒褐色砂層が10cmほど堆積し、地山面とみられる灰黄色砂層に達している。地山面までの深さは約0.55mで、その標高は2.95mほどである。下から水が染み出てくる。

遺物 2層目の暗褐色砂層から、山茶碗・素焼きの皿(土師皿)の破片が出土した。

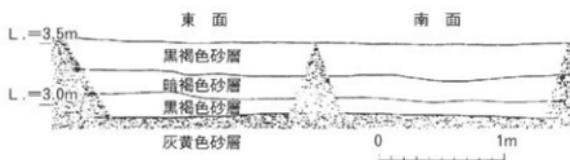
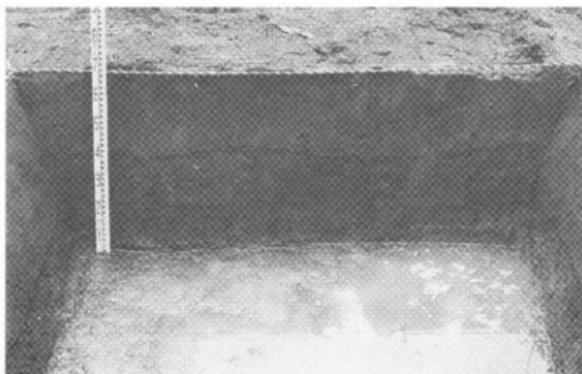


図54 No.14調査区層序

所見 遺物の出土は、わずかだが、包含層の暗褐色砂層が続いており、この地点より西に広がる遺跡の端にあたると思われる。



◀ 図55 No.14調査区
土層写真(南面)

No.15 調査区

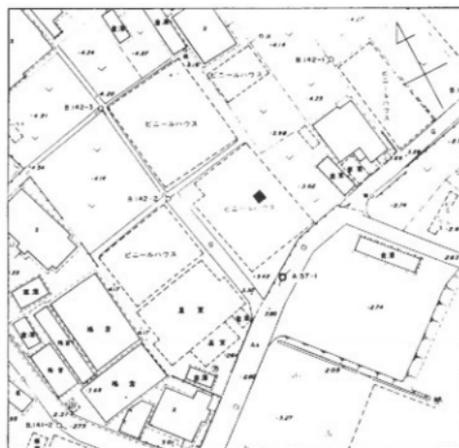


図56 No.15調査区位置図(S=1/1000)

焼甕・素焼きの皿・須恵器・山茶碗・山皿の細片が出土している。4層目の地山上の暗褐色砂層から、弥生土器の壺形土器1～3、土師器の壺形土器6・台付甕形土器4・7・8・高杯形土器9、須恵器の壺形とみられる土器片10、灰釉陶器の椀、山茶碗・山皿・片口鉢、須恵器質の薄手の皿5が出土している。

壺形土器1は、沈線で区画した間をハイガイの類いの腹縁がギザギサした貝で刻みを施す。壺形土器2は、口縁内面の羽状文を加えた面には、赤彩を施す。台付甕形土器4は、口縁外面に刺突文を巡らす。甕形土器7は、S字状口縁の小型のものである。須恵器質の薄手の皿5は、灰色で、底部に糸切りの痕が明瞭に残る。

所見 この地点とNo.19・No.20にかけての範囲に、弥生時代中期以降古墳時代前期にかけての遺跡が広がっているものと考えられる。

位置 No.15調査区は、海岸から内陸に向かって数えて3列目の砂堆列の南寄りの東端に位置する。現在の場所は、大田町の集落の南端にあたり、洋ラン栽培のハウスが並ぶ区域の一角にあたり、すぐ南方は一段低い面が広がっている。

層序 地表の標高は3.7mで、上から下へ向かって褐色砂層が15cm、ついで褐色砂層が40cm、その下に遺物を包含する暗褐色砂層が30cmほど堆積し、地山面とみられる黄褐色粗層に達している。地山面までの深さは約85cmで、その標高は2.9mほどである。

遺構 直径25cm、深さ12cmのピットを1カ所検出した。

遺物 2層目の褐色砂層から、常滑

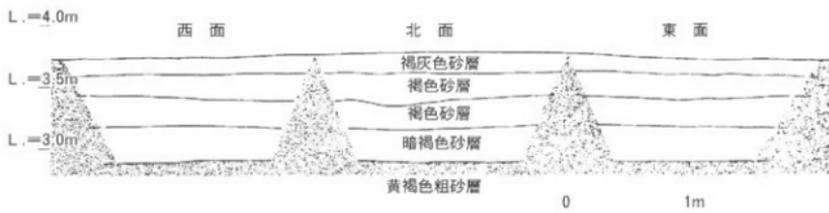


図57 No.15調査区層序

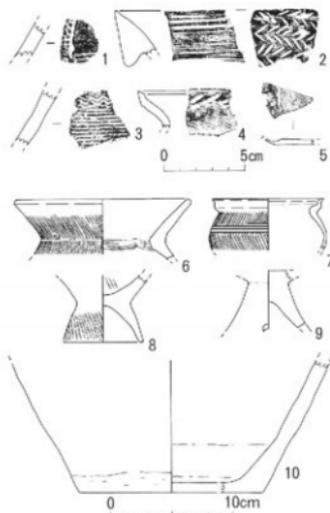


图58 No.15調査区出土遺物
(1~5・S=1/3 6~10・S=1/4)

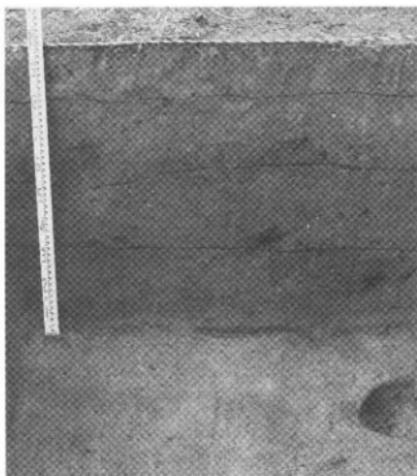


图59 No.15調査区土層写真(北面)



图60 No.15調査区出土遺物写真

No.16 調査区



図61 No.16調査区位置図(S=1/1000)

位置 No.16調査区は、海岸から内陸に向かって数えて3列目の砂堆列のほぼ中央に位置する。現在の場所は、常蓮寺から南へ伸びる道を100mほど南へ下った東側のビニールハウスが建てられていたところにあたる。

層序 地表面の標高は4.65mで、表面から下へ向かってオリーブ黒色砂層が15cmほど、その下に黒褐色砂層が25cm、ついで遺物を包含する褐色砂層が20cm～50cmの厚さで広がり、その下に10cm～20cmの厚さで黄褐色砂層が堆積し、地山面とみられる黄褐色粗砂層（上層より赤味をおびる）に達している。地山面までの深さは約0.9mで、その標高は3.75mほどである。

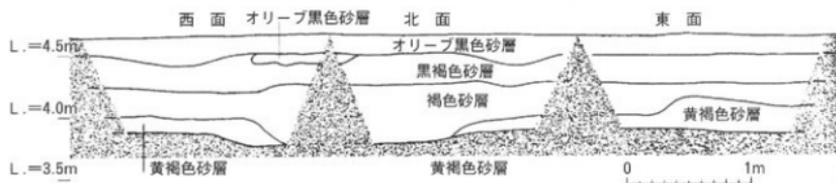


図62 No.16調査区層序

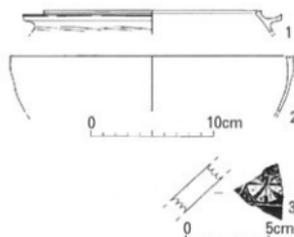


図63 No.16調査区出土遺物(1・2・S=1/4 3・S=1/3)

遺物 3層目の褐色砂層から、山茶碗・羽付鍋1・内耳鍋2・素焼きの皿・近世期の陶器片が、4層目の黄褐色砂層から、須恵器の甕・灰釉陶器の椀、常滑焼の大甕、素焼きの皿が出土した。

常滑焼の大甕片とみられる3は、円形8弁の花文の押印文を施す。

所見 この地点とNo.17地点の南には、貝殻と常滑焼の大甕片が広い範囲で分布しており、中世～近世の遺跡が存在するものと考えられる。



图64 No.16調査区土層写真(西面)

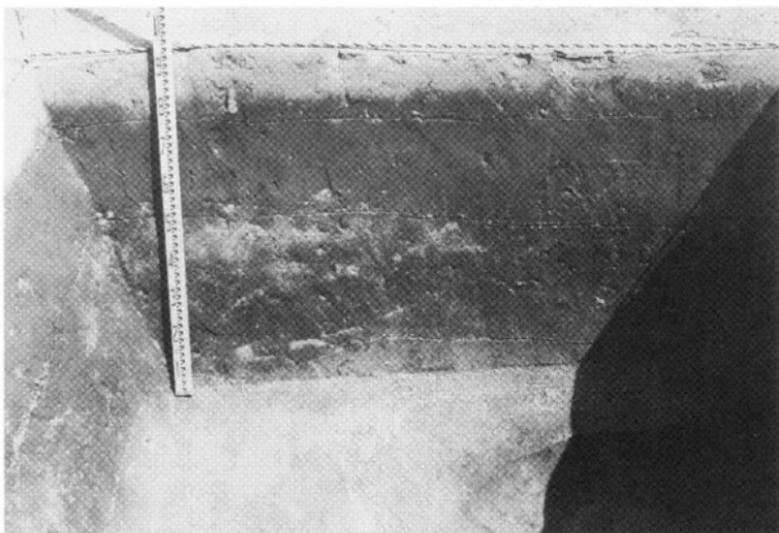


图65 No.17調査区土層写真(東面)

No.17 調査区



図66 No.17調査区位置図(S=1/1000)

位置 No.17調査区は、海岸から内陸に向かって数えて3列目の砂堆列のほぼ中央に位置する。現在の場所としては、常連寺から南に伸びる道筋のもう一つ東よりの道の東側にあたり、No.16より東へおよそ70mの畑である。

層序 地表の標高は4.15mで、表土から下へ向かって、褐灰色砂層が15cm、褐色砂層が25cm、遺物を包含する黒褐色砂層が40cmの順で堆積し、地山面の黄褐色砂層に達している。地山面までの深さは約0.8mで、その標高は3.4mほどである。

遺物 3層目の黒褐色砂層から、須恵器蓋杯・山茶碗・片口鉢・大甕・平瓦1・近世期の陶器2の破片が出土した。

平瓦1は、凸面に縄目叩きを施す。

陶器2は、素地が白色で、削り出し高台、透明の灰軸が内外面にかけられている。

所見 この地点とNo.16地点の南には、貝殻と常滑焼の大甕片が広い範囲で分布しており、中世～近世の遺跡が存在するものと考えられる。

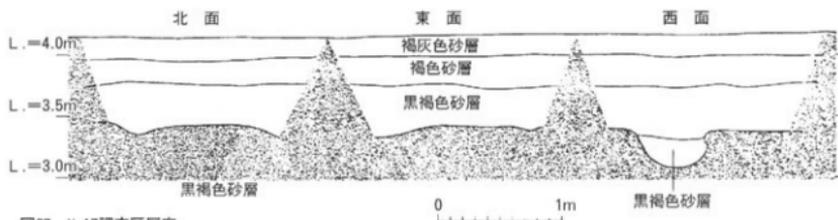
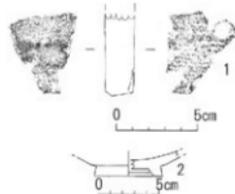
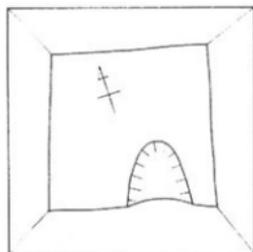


図67 No.17調査区層序



◀ 図69 No.17調査区出土遺物

◀ 図68 No.17調査区平面図

No.18 調査区



図70 No.18調査区位置図(S=1/1000)

位置 No.18調査区は、海岸から内陸に向かって数えて3列目の砂堆列のほぼ中央の東端に位置する。現在の場所は、市道名和養父線沿いに位置するNo.14調査区より西へ70mほど入り込んだ道沿いの畑である。周辺には畑やビニールハウスが広がっている。

層序 地表の標高は4.4mで、25cmほどの黄褐色の山砂の盛土の下に順に、黄灰色砂層が15cm、褐色砂層が25cm、黒褐色砂層が10cm、この下の層に乱れがあつて中世の遺物を包含する黒褐色砂層や落ち込み状の泥貝黒褐色砂層などがあつて、その下に黒色粗砂層が堆積し、地山面の褐色砂礫層に至っている。地山面までの深さは約1.2mで、その標高は3.2mほどである。

遺物 3層目の褐色砂層から、山茶碗・素焼きの土器・近世期の陶器・アカニシが出土。4層目の黒褐色砂層から、弥生土器2・3・須恵器蓋杯・山茶碗が出土。5層目の黒褐色粗砂層から、弥生土器・灰釉陶器碗10・山茶碗・山皿・大甕が出土。6層目の黒色粗砂層及び地山直上から、弥生土器1・4～9が出土した。

弥生土器1は、細頸の壺形土器とみられ櫛描横線文と研磨帯と沈線の下に櫛描縦位弧線があり、そこに浮文を加える。2は壺形土器とみられ櫛描様の縦線の上に沈線を巡らす。3はハケ原体の施文具とみられる板状具によって羽状の刺突文を施す。受口状の細頸壺の口辺部とみられる。4は壺形土器とみられハケ目の調整痕が残り、沈線を巡らす。5と6は先の細い間隔の不揃いの櫛

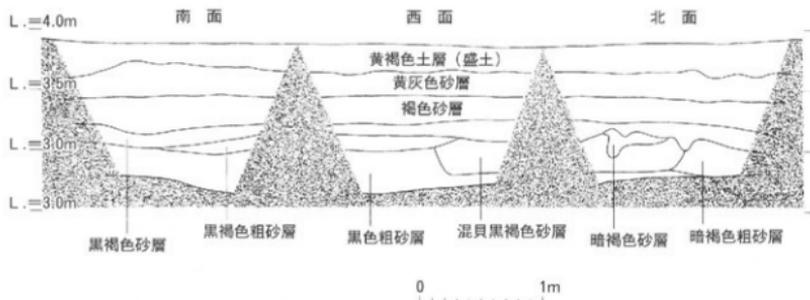


図71 No.18調査区層序

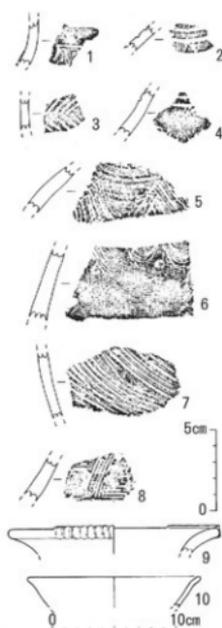


図72 No18調査区出土遺物
(1~8・S=1/3 9・10・S=1/4)

によつ横線と波状文を描く。ともに、壺形土器とみられる。7は条痕による調整を加えた甕形土器とみられる。8は表面が一部剥離するが、櫛による横線と弧線文が施されている。9は壺形土器の口縁部で、部分的に圧痕を施す。

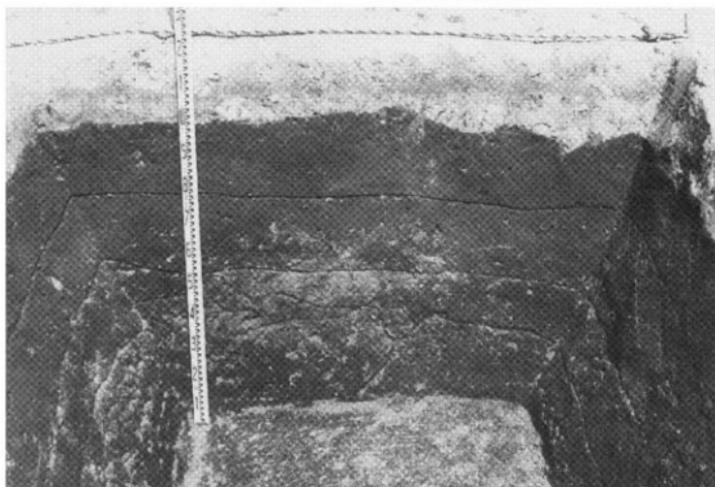
混貝黒褐色砂層から20cm³をブロック・サンプリングした貝類の組成は表4のとおりである。

所見 弥生時代中期の遺跡が存在するものと考えられる。

表4 No18調査区貝類組成表

種名	数量	固体数	%
鹹	ヤマトシジミ	7	32.6
	ハマグリ	7	32.6
	イボウミニナ	3	14.0
水	アカニシ	1	4.7
	シオフキ	1	4.7
産	アサリ	1	4.7
	サルボウ	0.5	2.3
	カガミガイ	0.5	2.3
	マガキ	0.5	2.3
計		21.5	100.2

▼ 図73 No18調査区土層写真(北面)



No.19 調査区

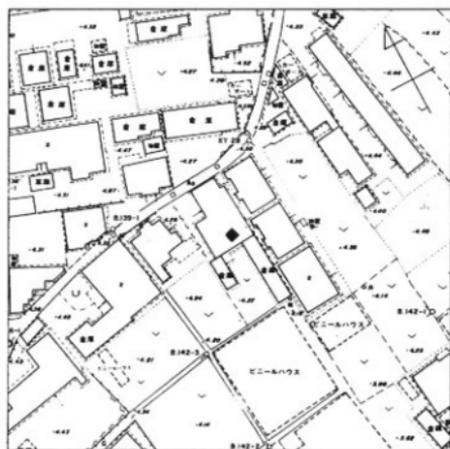


図74 No.19調査区位置図(S=1/1000)

位置 No.19調査区は、海岸から内陸に向かって数えて3列目の砂堆列の中央に位置する。現在の場所は、No.15調査区のすぐ北に位置し、細い道に面した宅地だったところである。

層序 地表の標高は4.25mで、表土層の20cmほどは盛土である。他の区域に比べ複雑な堆積を示すが、地山上に40cmの厚さで堆積する黒色砂層は、弥生土器の包含層である。盛土の下に40cmほどの暗褐色砂層、その下に10cmの褐色砂層があって、最下層のよくしまつて大変硬い黒色砂層に至る。地山面までの深さは、1.1mで、その標高は3.1mほどである。

遺物 盛土下の2層目の褐色砂層から、須恵器蓋杯の蓋6・土錘7・山茶椀・羽付鍋が出土。5層目の黒色砂層から、弥生土器1・2が出土。地山直上面から壺形土器3～5が出土している。

弥生土器1は、褐色の壺形土器で細条の弧文を描く。弥生土器2は、条痕を施し、甕形土器とみられる。3・4は壺形土器の口縁部と底部。5は高杯形土器の脚部で丸い穴を3方向にあける。器面全体にヘラ磨きを施す。3～5は古墳時代前期に属するものとみられる。

土錘7は直径9mm・長さ4cmで、3mmの穴をあける。

所見 古墳時代前期に位置づけられる遺物が割合大きな破片として出土しており、この時期を中心とする遺跡が、遺物包含層の厚さからみて、広い範囲で存在するように考えられる。

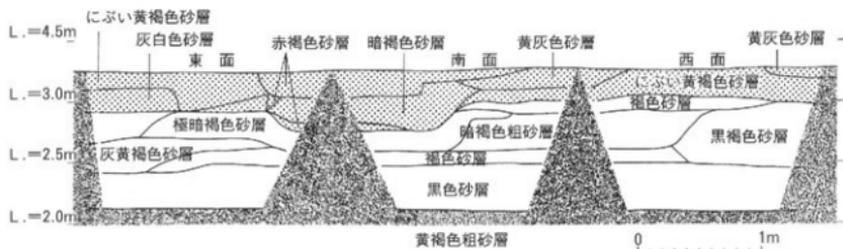


図75 No.19調査区層序

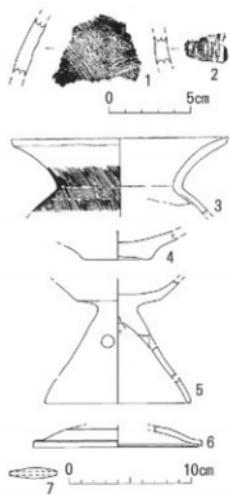


图 76 No.19 調査区出土遺物
(1・2・S=1/3 3~7・S=1/4)

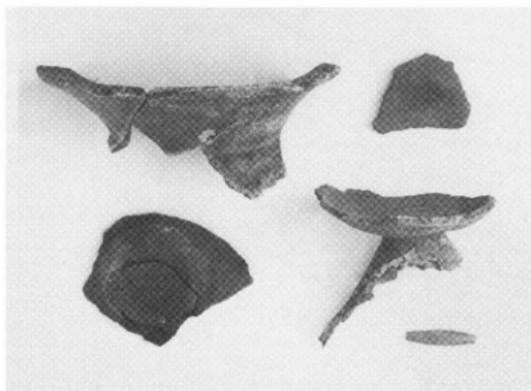


图 77 No.19 調査区出土遺物写真

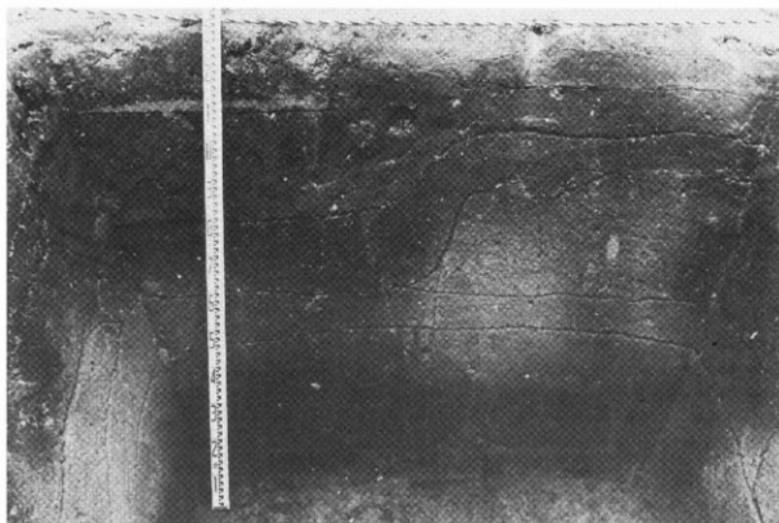


图 78 No.19 調査区土層写真 (南面)

No.20 調査区



図79 No.20調査区位置図(S=1/1000)

位置 No.20調査区は、海岸から内陸に向かって数えて3列目の砂堆列の南方の南縁に位置し、この辺りを境にその南側が一段低くなっている。現在の場所としては、市道名和養父線から120mほど西に入り込んだ道筋隣の畑である。

層序 地表の標高は4.4mほどで、大きく別けて4つの土層が整合な状態で堆積する。地表から、暗褐色砂層が25cm、上層よりやや赤味を増す暗褐色砂層が20cm、黒褐色砂層が15cm～30cm、弥生土器を包含する黒色粗砂層が30cmの厚さで堆積し、地山面の黄灰色粗砂層に達している。地山面までの深さは約1mで、その標高は3.4mほどである。

遺物 2層目の暗褐色砂層から、須恵器蓋杯の蓋・土師器の壺形土器・山茶碗が出土。3層目の黒褐色砂層から弥生土器の高杯形土器・台付甕形土器34・壺形土器2・6、須恵器蓋杯の杯44・山皿・石器41が出土。4層目の黒色粗砂層から縄文土器1、弥生土器の壺形土器3・5・7・12・22～27、甕形土器13～21・22～35、高杯形土器36～38・40、器台形土器39、砥石42、土錘43が出土した。

縄文土器1は、半割竹管を施文具として、下向きと上向きの連弧文を描き、口端に刺突を加える。縄文時代晩期前半の元刈谷式土器に属するものとみられる。

弥生土器の壺形土器2は、受口状口縁部の口縁部で横の沈線の上に間隔をおいて縦の複線を加える。壺形土器3は、胴部片で櫛描横線間に扇文を配し、縦の区画線も施す。4は籩状文を施す。5はハケ調整が残り、櫛描横線と波状文を施す。7は櫛描の羽状文を施す。8は不揃いの鋭利な櫛描線を施す。9・10は不揃いの細い櫛描文を施す。11はハケ調整後にヘラ磨きを施す。13～18

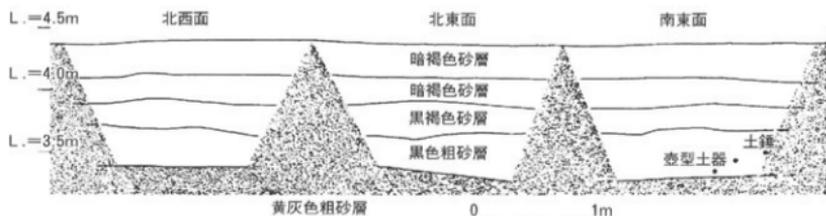


図80 No.20調査区層序

は条痕を施した壺形土器とみられる。15は縦位の羽状をなす。壺形土器19は口端部の平坦面に斜めの刺突を巡らす。20は受口状口縁壺で口縁外面に斜めの刺突を巡らす。21は頸部にはね上げの調整痕が残る。12・22・23はパレススタイル壺で、12は丁寧なヘラ磨き調整を施し、横線文を巡らした下方に赤彩を施す。22は櫛描波線文と横線文間に赤彩を施す山形文を巡らし、下端に赤彩を施した円文を巡らす。23は櫛描波線文間に「く」字形をした施文具によって赤彩を施す山形文

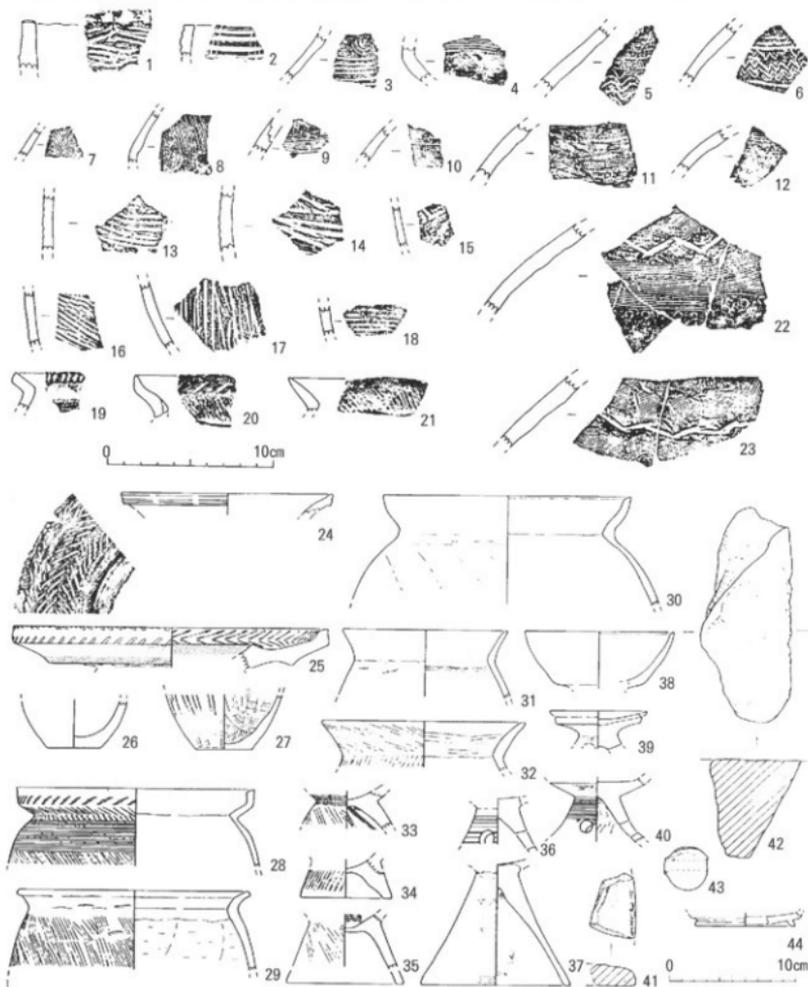


図81 No.20調査区出土遺物(1~23・S=1/3 24~44・S=1/4, 網目=赤彩)

を巡らす。この土器には、かご目様の痕跡が残る。24は口縁部に沈線を施す。25は二重口縁壺で口端上面の平坦面に板状施文具による押引文を巡らし、その内側に3列よりなる羽状文を施す。この斜線列の外側2条には赤彩を加える。また、内側の突出する面にも赤彩を加える。口端外面には上と下に向かい合わせの斜め刺突列を施し、刺突部に赤彩を加える。外面の屈折する稜にも赤彩を加える。26・27は小型の壺形土器の底部で、26は底面までヘラ磨きが施されている。27は外面に荒いハケ目の調整痕が残る。内側はヘラ削りで調整している。甕形土器28は受口状の口縁部をもつもので、受口部外面の稜線上に斜めの刺突文を施し、胴部の上半の肩部に横線文を施す。甕形土器29は口縁部がわずかに屈折して広がる。外面にハケ目調整の痕が残る。30は口縁部がわずかに受口状になる。外面は丁寧なナデ調整によって平滑に仕上げられている。31・32は口縁部が単純に「く」字形に開く。33～35は台付甕形土器の台の部分である。36～38・40は高杯形土器とみられる。36は拋搨横線を巡らし、円形の透かし穴を三方向に開ける。39は器台形土器とみられ、口縁部に稜をもつ。41・42は砥石で、42は全体が平坦ではなく、緩やかに窪んだ使用面が重なる。土錘43は、球形で8mmの穴を開ける。45は須恵器の高台付杯で、8世紀後半代のものとみられる。

所見 弥生時代中期と古墳時代初頭の遺物がまとまりをもって出土しており、No15・No19を含めた地域にこれらの時代の遺跡が存在するものと考えられる。

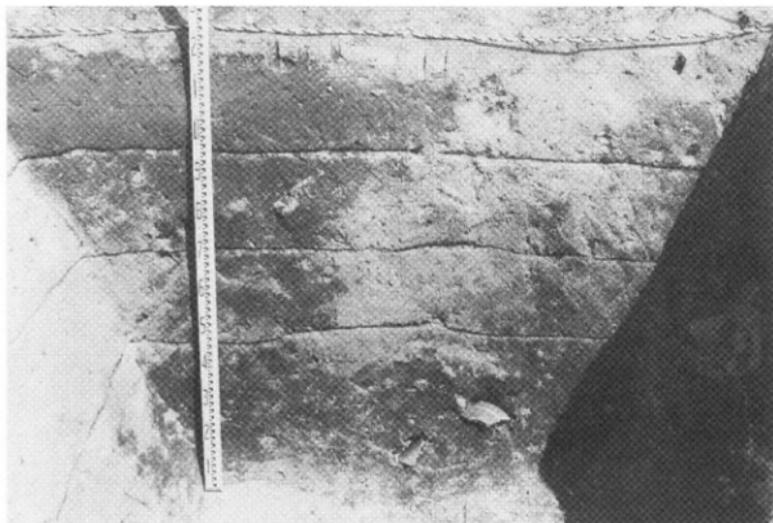


図82 No20調査区土層写真（南東面）

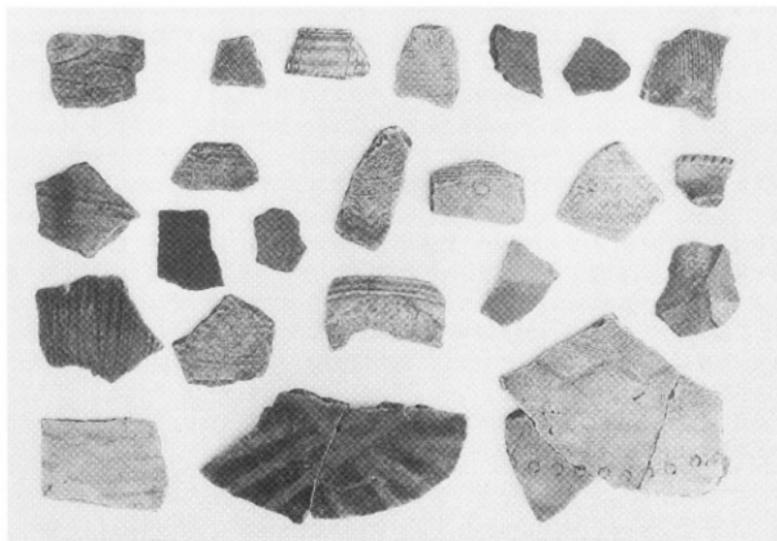


图83 No.20調査区出土遺物写真(1)



图84 No.20調査区出土遺物写真(2)

報 告 書 抄 録

ふりがな	ひがしはたいせきとうしくつちょうさほうこく
書名	東畑遺跡等試掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	立松 彰
編集機関	愛知県東海市教育委員会
所在地	〒476 愛知県東海市中央町一丁目1番地
発行年月日	西暦1997年3月24日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
	愛知県東海市	23222		35度	135度			大規模開
東畑遺跡	大田町東畑		43052	57分19秒	57分19秒	960819	80m ²	発計画地
畑間遺跡	大田町畑間		43050	57分38秒	57分38秒	~		域の事前
龍雲院遺跡	大田町蟹田		43051	57分38秒	57分38秒	960918		試掘調査
後田遺跡	大田町後田		43043	57分45秒	57分45秒			
下浜田遺跡	大田町下浜田		43042	57分47秒	57分47秒			

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東畑遺跡	散布地	弥生		弥生土器	
畑間遺跡	散布地	中世		山茶碗	
龍雲院遺跡	散布地	古代		製塩土器	表探遺物
後田遺跡	散布地	古墳		土師器	以前に台付発出土
下浜田遺跡	散布地	古代		製塩土器	

東畑遺跡等試掘調査報告

平成9年(1997年)3月24日

編集 愛知県東海市教育委員会

発行 〒476 愛知県東海市中央町一丁目1番地

印刷 株式会社 アイ・エス・ピー 名古屋支社

